

団長報告

雲南調査と雲南大学学術交流会

- 春季海外研究視察団の成果と今後の交流 -

古川 純（海外視察団・団長）

1. 企画の経緯

2年に1回開催される恒例の社研・春季海外視察は、1993年の韓国（麻島所長）に始まり、95年の中国（北京および上海、麻島所長）、97年のベトナム（水川所長）、99年の香港・シンセン（水川所長）、そして2001年の北京・大連（古川所長）とつづき、アジア地域の調査・研究にこだわって展開されてきた。各年の海外視察の成果に関しては、社研月報の各特集号において参加者からの研究報告・紀行文が掲載され、都合により参加できなかった所員に大きな刺激を与えたと思われる。

2001年調査は、所員の研究関心にも応えながら工場見学や企業視察に限られない学術交流の可能性を検討した結果、専修大学との提携校である北京大学国際関係学院を訪問して合同研究会を開催すること、従来からの企業視察に加えて大連市の政府機関や裁判所、法律事務所等をも視察して研究・調査の新たな発展をめざすこと、の2点を新たに実現することができた。

今回の2003年調査に関しては、社研事務局研究会担当（チーフ：野口 眞所員、なお野口所員は本視察企画途中に入院され調査・交流には参加されなかったが、本年4月2日逝去された）により予めアンケート調査が行われ、回答の中で最も多かった「雲南調査」を2002年度総会において確認し、実施案が企画されたものである。野口所員はこれを受けてすぐ中国雲南省および雲南大学の資料をインターネット等を利用して集められ、ご自身が学術交流会において発表をされる予定を立てられたのであった（なお、雲南省の地図は87頁を参照）。

本企画を立案するにあたっては、雲南大学と教育交流（雲南大学客員教授）の経験のある平尾光司所員（経済学部）の紹介により、長嶋要市先生（東京経営システム研究所代表取締役、北京大学顧問教授・精華大学顧問教授・西安交通大学名誉教授・吉林大学名誉教授）の多大なご援助をいただくことができた。所長（団長）・事務局長（秘書長）および野口研究会担当チーフは、長嶋先生と数回お会いして、「悠遊ワールド」（張 晞社長）をご紹介いただき、同社には訪問・調査・見学先のコーディネートを含めて視察旅行業務を引き受けていただいた。また昨年12月には、平尾所員を通じて社研宛に、雲南大学副学長・汪 戎教授から社研視察団の大

学訪問と学術交流を歓迎する旨の書簡を頂いた。

2. ご協力への感謝

長嶋要市先生は、同先生の雲南におけるお仕事を調整されたうえでわれわれの視察団にほぼ全日程同行され（昆明では東京経営システム研究所の許承豪・主任研究員（中国担当）も同行された）とりわけ昆明市人民政府（胡星副市长）の表敬訪問および昆明市対外貿易経済合作局（任衛京副局长、呂建東・外資企業処長）昆明国家経済技術開発区委員会（侯定辺副主任）の訪問と聞き取りにあたっては、長嶋先生の事前の周知な交渉のおかげで有意義な情報を得ることができた。雲南大学訪問に関しても経済学院副院长・張尊華教授（博士生導師）との学術交流、および少数民族に関して調査経験のある陸偉東先生のご講演（日本語）を実現することができた。今回の視察団の成果は、全体として長嶋先生（および許氏）のご協力によるものであり、あらためて団員を代表して厚く感謝申し上げる次第である。

もう一つ謝意を加えておきたい。雲南大学経済学院における学術交流会の実施に当たっては、野口所員に代わって田中隆之所員および宮崎晃臣所員が社研側からの報告を担当されたが、その際の日本語から中国語への通訳は施錦芳さん（本学大学院経済学研究科修士課程、国際協力論）に務めていただいた。実は、施さんは雲南省大理市（少数民族・白族の故郷）出身であるが、社研視察団の昆明市訪問の時期に（大学院の春休みを利用して）帰国する情報を得たわれわれは、施さんに雲南大学での学術交流研究会における通訳を依頼し、引き受けていただくという幸運を得たのである。施さんには、学術交流研究会だけでなく、昆明市における訪問先



との懇談会や最終日の答礼宴における通訳をすべてこなしていただくことになり、今回の視察団の活動に多大なご協力を頂いた。帰国後に社研の定例研究会として開いた「雲南視察報告会」（7月5日、神田校舎・社研会議室）には、施さんの学修上の都合によりご参加いただけなかったのが残念であるが、学内の交流はまた機会を得ることにして、ここに施さんの貢献にお礼を申し上げたいと思う。

3. 今後の国際的学術研究交流のあり方について

前所長・前事務局長は今回の訪問について学長に事前報告を行った際に、関連して雲南大学との今後の学術研究交流の可能性について打診を行うことのできる了解を得、また大林国際交流センター長からも「新しいタイプの」国際交流の検討の可能性について一定の感触を得た。雲南大学訪問の際に、雲南大学国際交流処の張 建生副処長(主持工作)に先の打診を行ったところ、喜んで歓迎したい旨のお答えを頂いた。国際交流センターは「新しいタイプ」の国際交流に関する要項案を策定し、検討を開始したようである。今後は社研として、これまでのように「アジアのなかの日本」という枠組みのなかで積極的に学術研究交流のネットワークを構築する展望をもってはどうかと考える次第である。

[付記] 今回の海外視察団の企画者であった野口 眞所員(経済学部教授)は、本年4月2日、逝去された。謹んで哀悼の意を表すものである。野口所員への追悼文が社研月報 479号に掲載されたので、ご参照いただきたい。

